両親間の葛藤と情緒的交流が
青年期の子どもの適応へ与える影響に関する心理学的研究
：子どもの情緒的安定性に着目して

令和３年度

筑波大学大学院　人間総合科学研究科
３年制博士課程　ヒューマン・ケア科学専攻
発達臨床心理学分野

廣瀬　愛希子

要　　旨

目　　的

両親間の関係は子どもの発達に影響を与える重要な要因である。現代は夫婦関係にかかわる問題が多く生じており，その子どもへの影響が懸念されている。

両親間の関係が子どもへ与える影響について説明する主要な理論として情緒的安定性理論（emotional security theory：以下，EST とする；Davies & Cummings, 1994）がある。EST では，家族関係に対して抱く心的表象を情緒的安定性（emotional security）と名づけ，両親間の関係は子どもの情緒的安定性を媒介してその適応へ影響を与えることが想定されている。また EST では，両親間の関係と親子関係との関連を重視しており，夫婦関係が養育や親子関係における子どもの情緒的安定性にも影響することで，結果的に子どもの適応へ影響を与えるというモデルを想定している。本論文は，両親間の関係が子どもの適応へ与える影響を検討するために，EST の考えに基づいて検討を行う。

本論文では，これまでの当領域の研究の問題を受けて，大きく 2 つの目的を掲げた。一つ目は，研究が遅れているわが国での関連尺度の整備や，主要理論である EST の考えの妥当性を示すことを通して，わが国の体系的な研究の枠組み作りに貢献することである。二つ目は，従来着目されてきた両親間の葛藤だけでなく，これまで検討がなされてこなかった関係の質も踏まえた検討を積極的に行い，新たな知見の獲得を目指すことである。

これらの目的意識のもと，両親間の関係が子どもの適応へ与える影響を検討するため，本研究は三部の研究で構成される。第一部では，わが国における EST の基礎的検討を行い，EST の考えの適用が妥当であるかを検討することを目的とする（研究 1，2）。第二部では，両親間の関係の質として両親間の情緒的交流に着目し，両親間の関係が子どもの適応へ与える影響を検討することを目的とする（研究 3－6）。第三部では，親子関係との関連を含めて，両親間の関係が子どもの適応へ与える影響の検討を目的とする（研究 7－9）。

対象と方法

本研究は，小学校高学年から高校生くらいの青年期の子どもに焦点を当てて，子どもや親を対象とした調査によって検討を行った。方法は，主に質問紙調査であり，学校や調査会社

を通して調査を実施した。学校での調査は，担当教員による一斉配布形式で実施され，調査会社に委託した調査では，ウェブ調査または郵送調査の形で実施された。

結　　果

第一部の研究は，EST の基礎的検討を通して，わが国での EST の考えの適用が妥当であるかを検討することが目的であった。

研究 1 では，EST の主要概念である両親間の関係における情緒的安定性を測定する Security in the Interparental Subsystem Scale（以下，SIS とする）の日本語版を作成し，その信頼性と妥当性の検討を行った。その結果，日本語版 SIS はおおむね原版通りの因子構造が得られ，十分な信頼性と妥当性があることが確認された。

研究 2 では，わが国での EST の媒介モデルの適用が妥当であるかを検討した。その結果，媒介モデルをもとに構成されたモデルの適合度は良好であり，EST の媒介モデルを適用することの妥当性が確認された。

第二部の研究は，これまで検討がなされてこなかった両親間の関係の質を踏まえて，両親間の関係が子どもの適応へ与える影響を検討した。関係の質として，特に両親間の情緒的交流に着目して検討を行った。

研究 3 では，子どもから見た両親間のやりとりの検討を通して，子どもに影響を与える両親間の関係の質の要素を探索的に検討した。その結果，子どもは様々な両親間のやりとりを認知しており，情緒的交流を始めとした葛藤以外の関係の側面が子どもに影響を与える要因になることがうかがえた。また，子どもは両親間の明らかな行為ではない，共同性や状態，雰囲気といった側面も認知していることが明らかとなり，これらの側面も子どもが両親間の関係を評価する上で重要な要素になる可能性が示された。

研究 4 では，両親間の情緒的交流尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討した。その結果，両親間サポートと両親間の日常的交流の下位尺度で構成される尺度が作成され，十分な信頼性と妥当性があることが確認された。

研究 5 では，両親間の情緒的交流が葛藤とあわせて子どもの情緒的安定性や適応へ与える影響を検討した。研究 5-1 の結果から，両親間の情緒的交流と破壊的葛藤の出現パターンは負の関係にあり，両親間の情緒的交流の高さは，子どもの適応に良い影響を与えることが示唆された。研究 5-2 の結果から，両親間の情緒的交流は葛藤とは別に，独自に子どもの情

緒的安定性へ影響を与える要因であることが明らかとなった。

また，研究 4，5 の結果から，両親間の情緒的交流の中でも，両親間の日常的交流が，両親間の関係における子どもの情緒的安定性へ与える影響が強く，子どもの両親間の関係に対する良好性の認知や情緒的安定性に良い影響をもたらすことが示された。

研究 6 では，両親間のやりとりに対する子どもの認知に影響を与える夫婦関係の要因を検討した。その結果，結婚コミットメントが両親間のやりとりに影響を与える重要な要因であり，子どもが認知する両親間のやりとりには結婚コミットメントのような実際の夫婦関係の質が反映されることが示された。

第三部の研究は，これまでに実施した本研究の結果を受けて，親子関係との関連を含めて両親間の関係が子どもの適応へ与える影響を検討した。

研究 7 では，両親間の関係と親子関係との関連を詳細に把握するために，夫婦間葛藤の様々な側面を測定することができる Conflict and Problem-Solving Scale（以下，CPS とする）の日本語版を作成し，その信頼性と妥当性を検討した。その結果，日本語版 CPS は十分な信頼性と妥当性があることが確認された。

研究 8 では，夫婦関係が養育に与える影響を検討した。その結果，破壊的な葛藤方略は養育の問題を促進させること，一方で建設的な葛藤方略と夫婦間の情緒的交流は適応的な養育につながることが示された。

研究 9 では，これまでの本研究の結果も踏まえて，両親間の関係が親子関係と関連しながら子どもの適応へ与える影響について包括的に検討した。その結果，これまでの本研究の結果を踏まえて構成された影響モデルの適合度は良好であり，両親間の葛藤や情緒的交流が，子どもの両親間の関係の受け止め方や親の養育を介して子どもの情緒的安定性に影響を与え，最終的に子どもの適応に影響を及ぼすことが示された。

考　　察

第一部の研究により，日本語版 SIS の作成とわが国での EST の媒介モデルの妥当性が示されたことで，わが国で EST に基づく検討を進めるための基礎が整えられた。

第二部の研究では，両親間の情緒的交流は子どもの適応の促進につながる良い影響をもたらすことが示された。また，従来着目されてきた両親間葛藤以外にも，子どもは様々な両親間のやりとりを認知しており，この両親間のやりとりの背景には夫婦関係の質が関係し

ていることが明らかとなった。両親間の関係が子どもへ与える影響を検討する上で，両親間の葛藤の影響を検討するだけでは不十分であり，両親間の関係の質を踏まえて子どもへの影響を検討する必要性が確認された。

第三部の研究から，両親間の関係が親子関係と関連しながら子どもの適応へ与える影響の部分は大きく，両者の関連の重要性が明らかとなった。子どもの適応を考える上で，両親間の関係が親子関係を始めとした他の家族要因を介して与える間接的影響は重要であり看過できないものである。

結　論

本研究は，従来の研究で示されてきたように，両親間の関係が子どもの適応にとって非常に重要な要因であることを示した。本研究は，両親間の関係が子どもの適応へ与える影響について，先行研究で示されてきた重要な知見を再確認した一方で，本研究独自の観点をもった検討により，これまでの先行研究にはない新たな知見を得た。

まず，本研究は，EST の考えの妥当性を示し，子ども側の観点から両親間の関係を捉える重要性を示した。子どもの情緒的安定性を取り上げた全ての本研究で，情緒的安定性は両親間葛藤などの家族要因により影響を受けることや，情緒的安定性が媒介効果をもって子どもの適応に影響を与えることを示した。このことから，子ども側の観点を重視して夫婦関係の影響を捉える EST の考えの妥当性の高さがうかがえた。これまでわが国では EST に基づく検討はほぼ皆無であった。本研究の成果により，わが国においても EST に基づく検討が進むことが期待される。

また，本研究は，両親間の関係が子どもへ与える影響を考える上で，両親間の情緒的交流が重要であることを示した。本研究により，両親間の情緒的交流，特にその一側面である両親間の日常的交流が，子どもの情緒的安定性や親の養育に肯定的な影響を与えることで，子どもの適応に良い影響をもたらすことが示された。これまでの両親間の関係が子どもへ与える影響に関する研究では，両親間葛藤の影響を検討することが主であり，両親間の関係の質に関する検討は最近まで軽視されてきた。両親間の情緒的交流を始めとした関係の質が子どもの適応にとって重要な要因であることを示した本研究は，学術的に意義があり，臨床的示唆も提供するものであった。

また，本研究は，子どもの適応における両親間の関係と親子関係の関連の重要性を示した。長年，わが国の子どもの発達に関する心理学的研究では親子関係ばかりが着目されてきた。しかし，本研究が示した通り，両親間の関係は子どもの適応への影響において，直接的影響だけでなく，親子関係を介した間接的影響ももたらすことで，子どもの発達に幅広い影響力をもつ重要な要因であることが明らかになった。

最後に，本研究は，わが国の当領域の研究における体系的な研究の枠組み作りに貢献したことや，従来取り上げられてこなかった両親間の関係の質に着目して新たな知見を得たことから，意義深い研究であった。本研究は，横断的研究であるといった点でいくつかの限界があったが，これらの限界を課題として受け止め，今後さらなる検討がなされることが期待される。